

東京オリンピックと短歌 奥田亡羊

九月八日、国際オリンピック委員会総会で、二〇二〇年のオリンピックが東京で開催されることが決定した。オリンピックを景気回復への起爆剤にしようとする政府の意向を反映してか、テレビニュースはお祝いムード一色、経済界からはリニア新幹線の開通を急ぐべきだなどという話まで出て、すっかりお祭さわぎである。ところが同じ日、毎日新聞が福島県内の自治体が「震災関連死」と認定した死者数が地震や津波による直接被害の死者数を超えようとしていると報じた。長引く避難生活で体調を崩したり、自殺に追い込まれたりするケースが増えているのだという。驚くべきニュースだが、オリンピック開催の騒ぎにかき消されてしまったように見える。こうして東日本大震災のこともやがて忘れられてゆくのかと思うと暗澹たる心境である。

一九六四年、白洲正子は東京オリンピックを尻目に西国三十三ヶ所巡礼の旅に出た。『白洲正子自伝』に、そのとき近江の山の上から開業したばかりの新幹線を見た感想を記している。「こっちは千数百年を生きた巡礼をしているんだ、ざまあ見る」。高度経済成長とともに日本の風景が一変し、日本人の生活スタイルも大きく変わった。正子の日本を探す旅は七一年、『かくれ里』に結実する。ちょうど柳田国男、折口信夫、宮本常一ら民俗学者たちの全集が完結し、国鉄がデイスカパーゾジャンのキャンペーンを展

開し始めたころである。

時代と呼応するように短歌の世界では、七二年に前登志夫『靈異記』、岡野弘彦『滄浪歌』、馬場あき子『飛花抄』といった日本の深層を探る三冊の歌集が生まれた。

・吐き棄つる種つややけき枇杷食めば夕やみの死者ら樹を揺さぶ
れり 前 登志夫

・巔いたきに睦月の神のくだりくる淨きしづけさ雪頻り降る

岡野 弘彦

・見上げたる森の高さに月ありて悔しきころ鬼も泣きしや

馬場あき子

死者、神、鬼をうたうこれらの作品を紹介したのは岩田正の評論「土偶歌える」である。「土俗性」「民俗性」をキーワードに三人の歌人にスポットをあて、原初世界への回帰を論じたこの評論は今読み返しても新鮮で示唆に富む。

わたしが今、興味を持つのはこれらの歌がなぜ死者、神、鬼をうたったのかという問題である。「土俗のうた」が生まれて来た背景には、高度経済成長のツケとして表面化した自然破壊や公害問題、七十年安保の挫折など様々な要因があったと考えられるが、それをより大きく捉えるならば、人間中心に進められて来た近代化への懐疑とそれに対する不安、眼に見えない世界への畏怖があったように思われる。

今日、わたしたちは誰もが、日本のどこに住んでいても、放射能の健康被害に対する不安を完全に払拭して生きることができない。未知の世界との境界を生き続けるしかないのだ。「土俗のうた」が生まれて四十年、放射能汚染という、より深刻な事態とともに振り出しに戻った気がするのはいだけだろうか。